佐藤太久磨
Takuma Sato (Hanyang University)

日本近代の問題的契機とその転回
——主権と人間、機械と戦争——

序　言

近代が文明の時代であり、人間や主権をその定立原理としていることは、誰の目にも明らかであろう。常識的ではあるが、近代は、「神」や宗教なるモデルから解放された時空として創造されたのである。

人間や主権は、たしかに近代において発見された。しかし近代を説明する際、それだけで事足りるであろうか。このような反問が出されれば、産業革命や資本主義などもそこに付け加えなければならないであろうし、そもそも近代においては人間や主権を否定する局面が皆無なわけではない。人間疎外や戦争といった現象が、それこそ近代において生じていたのであって——それも大規模なそれとして——、必ずしも人間と主権を保障する時空ではなかったのである。その限りで、近代は無条件で肯定しうる時代では決してない。近代が不可避的で、しかも不可逆的であれば、その実在的モデルたる人間と主権は、「生」と「死」のはざまに布置せしめられ、その極端な状況のなかにとどまり続けなければならないであろう。

近代人であるわれわれも死生と無縁でないように、そのような事情からは逃れら

れない。それは、近代の理路と隘路といっても過言ではない。では、日本近代の歴史に即してみれば、そのような状況は、いかにして現出し、いかなる思惟を背景にして表出してゆくことになるか。本稿では、日露戦争期を起点として、3・11 に至るまでの精神史を素描することで、その一断面を再構成してみたい。

では、なぜ日露戦争期（1904 ～ 1905）から 3・11（2011）までを対象とするのか。むろん 1 世紀超の全過程を、ここで詳論できるわけではない。しかし人間や主権を超え出た規範が生成し転回してゆく過程、そしてその一応の終着が、二つの現象に集約されているとの推定は的外れではなかろう。だとすれば、両時期のあいだには、近代の隘路が象徴的に示されているといっても過言ではない。というのも、3・11 にまで至る過程は、人間が自己超越的な、それゆえ自己否定的なエネルギーとともに過ごしてきたプロセスとして位置づけられるし、その大局的な背景には、人間否定的であると了解されながらも、文明を堪能せざるをえないという思惟がたしかに根付いていたからである。二つの現象とそのあいだの過程に直接的な繋がりは見出されないにしても、鳥瞰的に観察した場合、その二つを架橋するような思惟規範が介在していたことを看過してはならない。

そして日本の近代が、戦争の歴史であったことを思えば、戦争が主権の発動として遂行されたとしても、それはつねに結果（勝利）が保障されない状態にみずからを置いていたことを証するものである。日本近代は、自己否定の扉をみずから開放せざるをえない境遇に自己を定立していたのである。主権は、文明の利器によって破壊されないとも限らない。その意味で、先の敗戦――「死」を象徴する歴史事象――とは、人間否定的な文明をみずからが手繰り寄せたこと、そして戦争という危局の直中にみずからを布置してしまったことが、一致した現象として解されるべきであろう。しかし敗戦を挟んでもなお、それまでの矛盾や煩悶は解決されず増殖し、それらは戦後へと持ち越されることとなる。

その意味で、近代は危機が常態化しているのであって、近代をよりよく探究するためには、その危機の内実を点検する作業が要請されてもおかしくはない。本稿では、このような問題視座から、日本近代の里程に点綴された背理を検出し、それらを解消してゆかんとする精神史的営みの歴史、そしてその営みが裏切られてゆく歴史を

描出してみたい。

第１章　日露戦争期の位相

（１）　終わりか、始まりか

さて、日露戦争期といえば、日本が戦争において勝利を収めることによって、幕末維新期以来の懸案事項であり続けた民族的独立が達成された時期として位置づけられてきたように思われる。日露戦後は、既存の国家目標が実現されたという意味で、国家目標を喪失した、一種の空白期として理解される。このような視座にのみ頼れば、日露戦後は、ある時代の終焉を象徴する時期として評価されることとなろう。

しかし旧い時代の終わりは、新たな時代の幕開けである［★1］――それゆえ、国家的価値に代わる新たな価値が発見されたとしても不思議ではない。事実、日露戦後には、個人主義思想や自然主義文学が広がり、婦人解放運動が開始されたことにみられるように［★2］、「国家的価値」から解放された「個的価値」に重きを置いた思惟（私的領域）が肥大化してゆくこととなる［★3］。「大正デモクラシー」期の指標とされる「国家的価値に対する非国家的価値の自立化の傾向［★4］」は、すでに日露戦後の状況として表出されつつあったのである。その限りで、この時期は、「大正デモクラシー」の前提が成立し、「大正デモクラシー」期に向けた過渡期として理解することができよう。「大正デモクラシー」の始点が、日露戦後（1905）に設定されるのも決して故なきことではないといえよう［★5］。

日露戦後とは、(1) 国家目標喪失の時代であると同時に、(2)「大正デモクラシー」期への過渡的時代であったように、ある歴史的特定段階における「終わり」と「始まり」がともに集約された時代状況として位置づけられるのである。

日露戦争期に関する従来の見解は、ともに誤りではない。しかしここで果たすべきは、一種の空白期とでもいえるその時期に、いかなる思惟規範が誕生し、それが

いかにして爾後の歴史を規定してゆくのか、その効力を解き明かす作業であろう。

本稿では、当該期の時代状況を、以下のように定義しておきたい。国家意思を超越するような規範を、みずからが建設した時空間――主権や人間を超え出た自己超越的なるものが招請され、その創成と拡延が実現されてゆく時代として、である。それは、自己規律的であるがゆえに自己拘束的な構図を描くが、そのような規範はみずからの手によって創造されるため、徹底的な自己没入も可能にする時空として編成されてゆくこととなる。

やや抽象的ではあるが、かかる構造が着実につくり上げられたのが、日露戦争期にほかならなかった。そしてそうしたモメントは、日露戦争を意味づける言説構造の内部に組み込まれていたのである。

（２）　自己創造的規範の創出―― 日露戦争期の言説構造

（２）―１　立憲政治と専制政治、文明と野蛮の闘い

かつて福沢諭吉（1834 ～ 1901）は、日清戦争を評して「文野（文明／野蛮）の戦争」として意味づけてみせた［★6］。日本と清国をそれぞれ文明国と野蛮国に比定し、日本の勝利を文明論的視座から眺望した、あの有名なテーゼである。

日清戦争期の福沢によって示されたロジックは、日露戦争期において論者を替えつつも、ほぼ同様のかたちで繰り返された。大隈重信（1838 ～ 1922）や加藤弘之（1836 ～ 1916）は、その代表的論者として挙げられよう。大隈と加藤の両人が、日露戦争を文明と野蛮の戦争として観察していたことは、当該期に至っても、なお福沢文明論の視座が有効であったことを物語るものである。加藤は、日露両国をそれぞれ文明と野蛮と表象していたし［★7］、大隈も以下のように述べ、「文明／野蛮」の二分法的視角から日露戦争を説明していた。いわく、「此度の戦は、日本なる文明の小国が、露西亜なる野蛮の大国を撃つので、従来例のない戦で日本は文明の義戦を遣るのである」［★8］と。

そしてそうした解釈にあって、政治体制における文明と野蛮は、立憲政治と専制政治とに当て嵌めて思惟される。文明は立憲政治と、野蛮は専制政治と、それぞれセッ

トで語られるのである。「野蛮国の戦は、君主若しくは君主を囲繞する一部分のものが、其の欲望を満たす為めに戦ふもの」[★9]というように、である。

美濃部達吉（1873 ～ 1948）と吉野作造（1878 ～ 1933）も、その例外ではない。両者は、ともに日露戦争を立憲政治国家と専制政治国家の闘いとして意味づけてみせたのである。

日露戦争について、美濃部が体系的な論述を残しているとはいえないが、その断片は立憲君主国と議会政治に関する記述から垣間見ることができる。美濃部によれば、「立憲君主国ニ於テハ君主ガ無制限ニ統治権ノ全部ヲ行フモノニ非ラズ」[★10]と論及されるように、当該国家において君主は無制約の権力主体ではない、と解される。立法行為を君主と議会の共同行為、法を君主と議会の意思の合成物とみなした美濃部にすれば[★11]、議会の権限が国権に及ぶ国家体制こそ立憲国家の名に相応しかったのである。

「吾国ヲシテ君主専制国タラシムルコトガ何故ニ　皇室ノ尊厳ヲ保ツニ必要ナルカヲ解スルコト能ハズ」[★12]――君主専制国家に対する批判は、こうした君主権力の有限性を前提とした立憲君主国家論から導かれる。美濃部にとっては、「立憲か専制か」が国家体制を評価する参照軸に設定されていたといえよう。むろん参照されるべきは、前者である。「人ハ日露ノ戦争カ立憲政治ト専制政治ノ争ナリト云フ。立憲政治ハ吾国民ノ誇ニシテ又国威発揚ノ源ナリ然カモ尚ホ独リ法理ニ於テ吾国カ露国ト同一ナル専制ノ君主国タリトスルコトガ何故ニ吾国体ノ尊厳ヲ維持スルノ所以ナルカ」[★13]との発言は、その証跡以外の何物でもない。戦争のイデオローグとまでは断言できないが、美濃部の場合、日本が立憲国家であること――そのことが専制国家（ロシア）批判の規準に据えられていたのである。

このような弁証方法は、同時代の言説空間において珍しいものではなかった。吉野作造は、美濃部と同じような手法で日露戦争を意味づけた知識人のひとりである。吉野に特長的なのは、美濃部に比べ、戦時へのコミットを深くし、その渦中で美濃部の解法をより積極的に再編してみせた点であろう。

吉野は、近代政治の法則――「専制（求心）」から「民権（遠心）」へ――から演繹する仕方で、ロシア専制国家を「文明の敵」として批難し、日露戦争を文明のた

めの戦争として位置づけたのである［★14］。そこでは、「露国に於ける人民的勢力の激増を来せる原因は疑もなく日露戦争なるべし」［★15］、「露国に於ける人民的勢力は日露戦後頓に勃興激増して専制政治没落の期も亦将に近からんとす」［★16］との発言に明らかなように、日露戦争における日本の勝利によって、ロシア国内の民主化が促進される、との展望も併せて示される。日露戦争は、いわば「政治的文明」のための闘争として肯定されたのである。

人的繋がりは別にして、福沢文明論のモチーフは、それから約10年後の日露戦争期に継承されたとみて間違いない。その限りで、1901年に肉体的死を遂げた福沢の文明論は生き長らえることができたのである。しかし日露戦争を文野の戦争として意味づけたのは、国内の知識人だけではなかった。ロシアの革命家レーニン（1870～1924）は、まるで以上のごとき「日露戦争＝文野戦争観」に応答するかたちで、日露戦争を眺めていたのである。

> ロシアの政治的危機の発展は、いまやなによりも、日本との戦争の成行にかかっている。この戦争は、なににもまして専制の腐敗を暴露したし、いまも暴露しており、なににもまして専制を財政と軍事の点で無力化しており、くるしみぬいてきた人民大衆をだれよりもくるしめて蜂起へと駆りたてている。この犯罪的な恥ずべき戦争は、これらの大衆にこのようなはてしない犠牲を要求しているのである。専制国ロシアは立憲国日本にすでに打ちやぶられている。［★17］

引用文のモチーフから明らかなように、レーニンにとって、日露戦争は革命を成功に導くための階梯にほかならなかった。ここでは、革命実現の要件（プロレタリアート戦争）として戦争が容認されているのである。日露戦争における日本の勝利が、日本の「革命的任務」とまで論じられる所以である。

こうしたロシア専制政治に対するレーニンの批判的言辞は、まさしく日本国内の知識人と同様の視角から組成されている。日露戦争は、レーニンによって「すすんだ国とおくれた国との戦争」［★18］と表現されたが、そのこと自体、文野戦争観が国境を越えて分有されていたことを物語っていよう。立憲国家は「すすんだ国」（日

本)、専制国家は「おくれた国」(ロシア)として表象されたのである。レーニンにとって、日露戦争は政治体制における文明と野蛮の戦争として映じていたのである。

革命を許容するかどうかは別にして、専制政治の解消に立ち向かわんとするレーニンの意思が、美濃部や吉野の趣意とその指向を同じくしていることは、もはや疑いえない[★19]。文野戦争観は、敵対国であるロシア内部でも共有されていたのである。レーニンの事例は、その空間的広がりを意味しているわけである。それだけではない。こうした日露戦争の意味づけ方は、時間的な広がりをもって延命される。「文明国標準」[★20]と称される指向、その効力を低く見積もってはならない。それが証拠に、後の1930年代においてもなお、日露戦争を立憲主義と専制主義の闘いとして定式化する試みが復誦されていたのである[★21]。

以上のように、日露戦争を意味づける言説行為は、「文明国でなければならない」という自己規律を創造する実践にほかならなかったのである。そしてこのような自己規範が成立するか否かは、戦争の成否にかかっていたといっても過言ではない。争闘において勝利を収めなければ、文明国家、立憲国家であることはなんら意味を持たなくなるからである。闘争社会において優者――窮極的には、戦勝国――として存立することが、文明国の証左として位置づけられていたとすれば、前記した思惟規範と重なり合うかたちで、競争社会のなかでしか自己確立できない状況にみずからを追い込んでしまわざるをえない。

それは、もはや永続運動としか呼びようのない無限の自己規律となって日本近代の行方を規定してゆくこととなろう。

(2)―2　人類社会の法則――生存競争

そうした自己規律と見合うようなかたちで、日露戦争期には、人類社会の法則に適合的でなければならない、という客観的規範も生み落とされた。「日露戦争=文野戦争観」は、当該期における中心的視座であったが、そればかりではなく、人類社会における生存競争の避けられなさに着眼したロジックもまた、日露戦争を正当化する論理として持ち出されていたのである。

人類が競争社会であり、そうであるがゆえに闘争を回避できない、との観測は、日露戦争期以前からすでに提起されていたが、とはいえ、在来の視座が活かされるかたちで、生存競争の法則に寄りかかる契機が、日露戦争を意味づける行為のなかに内蔵されていたことを看過してはならない。ここでは、日露戦争を通して、そうした原則が再確認されていったプロセスとして理解しておこう。

たとえば、社会進化論者として知られる加藤弘之は、日露戦争を支持する立場から、「各有機体は自己の維持発展即ち自己の利益を計るべき根本動向と云ふものを自然から與へられて居る」[★22] と論じ、団体間の争闘を必至のものとして捕捉していた。加藤によれば、国内におけるそれとは別に、各国家間に道徳法律は適用されないのであって、ために国際社会における競争は、以下のように、人類必然の産物としてその位置を与えられる。

> 団体と団体との競争に於ては互に勝を占めて敵を亡ぼさうといふ考のみであるから其間には道徳も法律も起らず又利己心が利他心に変性するといふこともない唯力の及ぶ限り他の団体を害しやうと云ふことになるから其競争は極めて激烈になるのであつて殆ど猛獣の闘争と同じことである [★23]

こうした加藤の理解が、国際社会と国内社会の二元論の立場から組み立てられていることは、容易に推察されよう。加藤にしたがえば、国内において「利己心」は「利他心」へと変性し団体内結合を鞏固なものにするが、国家間関係においては、「利己心」だけ、いわば剥き出しの暴力だけしか作動しないのである。しかしこのような解法は、加藤に独自のものではなかった。

加藤の発話に呼応するように、『進化論講話』(1904) の著者で、動物学者として著名な丘浅次郎 (1868 ～ 1944) も、生物学的観点から生存競争、優勝劣敗の必然を承認していたのである。「かく考へ来れば人間の生存競争に於ても国と国との間では唯自己の力の外には頼るべきものはないのである (中略) 人類の生存競争では総て他の事情が同じとすれば一国内の個体同志が、道徳法律を重んじて協力一致するものが、勝つ理屈である」[★24] との言及は、その証左となろう。

丘は加藤ほど、日露戦争の正当化に深く関与したわけではなかったが、戦争期に団体間の競争を説くその指向は、事実上日露戦争の遂行に助力してしまう結果に落ち着かざるをえない。その意味で、加藤と丘の両者は、ともに生存競争の法則――とりわけ団体間のそれ――から日露戦争を陰に陽に合理化していたのである。

以上のように、日露戦争期には、「文明国でなければならない」という自己創造的な規範が生み出されたのと併行して、人類社会の客観法則（生存競争）があらためて確認され、そのなかで自己を確立しようとする思惟規範が、より確実なそれとして結晶していったといえよう。そしてこれら二つの思惟規範を招き寄せてしまった以上、日本近代の対外行動はそれらによって制約されてゆかざるをえない。かくして日露戦後の日本は、生存競争社会のなかで、みずからを文明国として編成してゆかざるをえなかったのである。

（3） 解放と制約――主権の処遇をめぐって

そのような社会のなかで、しかも戦時においては、主権は解放されざるをえない。主戦派の七博士に名を連ねていた寺尾亨（1859 ～ 1925）はじめ、同時代の国際法学者たちのロジックは、絶対主権理論に基づくものとして構成されていた［★25］。主権国家より高次の権力主体を想定しえない近代国際社会において、そうした社会を統御する主体は主権国家でしかありえない――かくのごとき認識論的枠組に準拠するかたちで、主権の完全性は弁証されてしまったのである。かれらが多分に自覚的であったかは別として、そうした解釈にあって、戦争は「不得已必要的行為」［★26］として是認されるよりほかないのである。日露戦争は、いわば主権の発動として遂行されるべき闘争であったといえよう。

しかしここで特記しておきたいのは、日露戦争期においては、主権が解放されると同時に、主権制約のベクトルも包含されていた、ということである。事後的な説明ではあるが、国際法学者の前原光雄（1902 ～ 1991）は、19 世紀末から 20 世紀の初頭にかけて、国際主義的潮流が盛んになってきたことを回想している［★27］。そこでは、世紀転換期を迎えるなかで、国家はもはや主権絶対主義に依拠できなくなった

こと、国家を取り巻く環境（国際社会）への配慮なしには自己を定立できなくなったことが回顧されている。

主権は戦時において解放されると同時に、一挙に制約されなければならなかったというべきか。そしてそうした主権制限のモメントは、日露戦争を意味づける行為のなかに組み入れられていたように思われる。

加藤弘之の「利己―利他」論は、この点で注目に値する［★28］。すでに確認しておいたように、加藤は、「日露戦争＝文野戦争観」に立脚し、日露戦争を団体間闘争の必然的所産として観察していたが、他方で、国際社会における利害が次第に一致してくると、国家は「利己」的行為にのみ耽溺することは許されないと説き、徐々に「利他」的行為が顧みられなければならないと力説していたのである。

> 兎に角今日迄の実際に於て文明各国の関係が次第々々に緊密になつて今日に於ては文明各国が大体に於て利害を一にして居ることの多いのは明白争ふべからざることで彼是議論のあるべき筋でないして見れば今日に於ては各国が皆自国の利益のみを目的として毫も他邦の利害に頓着なく其行動を擅にすると云ふことは最早出来なくなつたと認めねばならぬ換言すれば各国が自己に都合のよいことばかりしやうと思へば多くの場合に於ては必ず他各国の利益を害せねばならぬ他各国の利益を害すれば畢竟自国の不利益を招くやうになるといふやうな次第であるから、そこでどうしても今日は自国の利益を専らにして利己的行為のみをすることは出来ない時勢となつたのである［★29］

このようなロジックが、適者生存の法則から導き出されていることは疑いえない。ともあれ加藤は、こうした論法によって日本とロシアを、それぞれ文明社会における適者と不適者に分類することができたのである。

だとすれば、主権的意思や国家意思は、それらを超越した空間に配列されるよりほかない。文明国間協調、ないしは利他的行為が要請される時空において、主権的意思や国家意思は、そうした状勢変質にみずからを適応させてゆかなければならないのである。その条件をクリアしたときに、自己は保全されるのであって、自己保全のため

には、主権的意思に対する制約も受忍されなければならなかったといえよう。この点については、美濃部による主権保護のための学説、主権の自己拘束説が、日露戦争期につくり出されていたことを踏まえれば、よく理解できるはずである。

戦時において、主権は自衛権の発動として解放されると同時に、一挙に制約されなければならなかったのである。そうした契機は、日露戦争を正当化する論理のなかにおり込まれていたのであって、その限りで、日露戦争期には、第一次世界戦争後を特長づける国際協調、インターナショナリズムの前提が畳み込まれていたといえよう。

主権が次に開封されたのは、日本が国際的に孤立し、敗戦にまで至る過程での出来事であったが、その地点に辿り着くまでは、もうしばらく文明を謳歌できたであろうことは想像に難くない。しかしそこには、人間そのものを否定しかねない深刻な隘路が内在していたのである。

第２章　機械と人間――日露戦後以降の問題状況

（１）　物質文明、機械文明への没入

以上のような事態の現出は、文明化という自己目標が際限なく追求される状況の到来として理解しうる。日本の「政治的文明」は、日露戦争の結果によって保障された。しかし自己保全のためには、自己制約的な規制を設定するだけでは事足りなかった。「生存競争」というシーンが想定される限り、軍事力をはじめとする総合的な実力を保有することへの意思が掻き消されることはありえなかったからである。日露戦後における軍拡競争は、その政治史的表現といえようが、その意味において、物質文明は追求されるべくして追求されたのである。

物質文明を日本に引き寄せる行為は、明治の後半期に当たる日露戦争期を待つまでもなく、維新以来からの一貫した目標であったに違いない。日露戦後に特長的なのは、以下の行論で確認してゆくように、文明化が人間社会に対して牙を剥こうとも、やむ

を得ない現象として承認され、文明への欲望がより一層先鋭化されるに至った、という点であろう。文明の弊が各所で説かれながらも、文明化は推進されていかざるをえないのである。文明国として生存競争に勝ち抜いてゆかなければならない、という自己規範は、日露戦争で消失することはなく、日露戦後以降にも引き継がれてゆくのである。

先述した丘浅次郎は、かくのごとき文明化を探求し続けるべきことを説いた論客として位置づけられる。とりわけ物質文明の弊害が説かれるような状況にあっても、丘はその抛棄を是としなかったのである。長文の引用になるが、厭わず確認しておきたい。

> 然らば物質的文明を一時見合せて、責めては人心堕落の速力を少しく緩めては如何と云ふ論が出るかも知れぬ、現に物質的文明の進歩を以て世道廃頽の原因と誤り見做す人々は「自然に帰れ」などと叫んで、現代の文明を呪ひ罵つて居るが、之は到底行はれぬのみならず、国力発展の上に頗る有害な議論である、抑も物質的文明なるものは、今日の世の中に於ける国家存立の必要な条件で、之を退けては生存が覚束ない故、一刻でも其進歩を止めることは出来ぬ、若しも地球上に国が唯一つよりなかつたならば、其場合には物質的文明を進めるも廃するも随意であらうが、多数の国が互に睨み合ふて対立して居る現世では、物質的文明を止めることは即ち亡びることに当るのである、今日の戦は決して大和魂のみでは出来ぬ、敵と味方との愛国心の度が略相均しいときには、一歩でも先へ文明の進んで居る方が勝つ機会が多い、（中略）軍事に限らず総て他の方面にも物質的文明を進めて行かねば、今日の劇烈な競争場裡に優者の位地を保つことは出来ぬ、特に我国の如き、物質的文明に於ては遙に他の数国に劣つて居る国で、早くも物質的文明を呪ふ者のあることは、将来の国運進歩に対し、誠に憂ふべきことであらう、［★30］

「自然に帰れ」という標語が、丘に響くことはない。物質文明を追い求める指向は、「国家存立」「民族の維持発展」［★31］のため、決して捨て去ることはできなかったのである。丘のこうした性向は、別の箇所でも確認できるが［★32］、そのなかでも興味

深いのは、大和魂や愛国心なる精神を誇張したところで、それらが同程度であった場合、物質文明の進んだ方が「優者」たりうる、と観測されている点である。丘の理解にあって、戦争状態（競争）は決して消滅しないのである。このような指向は、後述するように、第二次世界戦争下の科学者にも共有されたそれであった。物質文明に対するコンプレックス――特に欧米に対するそれ――についても、同様である。ここには、精神だけでは如何ともし難いこと、それゆえ物質文明を欲求すべきことが説かれているのである。

そうした劣等感は、当然のことながら、同時代的にも吐き出される。そのような言葉は、経済学者の河上肇（1879 ～ 1946）によって発せられた。河上は、人類の発達史をスケッチしたエッセイのなかで、「現代は機械の時代である」［★33］と語り、現代を物質文明、分けても機械文明が発達し、産業革命を経験した社会として定式化してみせた。しかし河上は、「現代の文明は即ち機械の文明であるに、吾国民は機械の発明は勿論其の応用に於いても遙に欧米人に劣る処ある」として、「日本国民の将来を悲観」せざるをえなかった［★34］。欧米に対するコンプレックスがあったればこそ、機械文明の促進は訴えられる。河上が辿り着いた結論は、丘のそれとほぼ同様のものであった。「然るに人往々にしていふ、物質的文明は西人の長たり、吾は吾が長たる精神的文明を以て之に対抗せんのみと。危い哉言。物質的文明と精神的文明と譬へば車の両輪なり、其の一を廃せば車進む能はず」［★35］として物質文明推進の立場を忽せにすることはなかったのである。

ここで思い返されるのは、日本の文明化に関する夏目漱石（1867 ～ 1916）の言葉であろう。日本の開化が表層的に過ぎるとして批判的な態度を示した漱石が、小説『それから』（1909）のなかで登場人物に語らせた一言、「もう君、腹が裂けるよ」との批評とは裏腹に、丘や河上の事例にみられるように、同時代の日本においては文明化が堪能されていたのである。そして文明化の追求、機械文明の探求は、人間疎外の問題（マルクス）をそう感じさせることなく確実に進展していったのである――それでは、その果てにはいったい何が待ち受けているのであろうか。

（2） 機械文明と日本精神

その先に待ち受けていたものは、人間超越的な機械文明が肥大化した現実であった。河上が「現代の文明は人力の所生でなくて機械の所生である」［★36］と書き記していたように、現代文明社会においては、人間の果たす役割が局限され、機械が人間に代わって主人公となりつつあったからである。丘や河上自身、そうした現象を推し進めた当事者であったが、そのような事態が着実に進めば、機械文明の人類に対する復讐劇はもはや避けられない。

日露戦争に続く第一次世界戦争は、そうした事態を進行せしめた転機として理解されるべきであろう。第一次大戦は、「物質的文明が其の極所まで進んで、誤つて自滅（自己破壊）の途を取つがために起つたもの」［★37］と意味づけられていたように、「欧洲文明の没落」「欧羅巴の自殺」として解釈されていたのである。［★38］

機械文明の人類に対する優位は、戦争状態としてのみ現出するわけではない。それは、日常生活の境域にまで浸潤し、人間とその環境を変質させてやまない。アジア主義者で日本主義者であった満川亀太郎（1888～1936）は、産業革命を経たヨーロッパ社会が「行詰りの極に達し」ていると見做したように、機械文明以後の社会を没落したそれとして表象していた人物であった。満川は、以下のように、機械文明の「目的」と「結果」が一致しないことに注意を促している。

> 諸機械を発明した人の精神は決して斯の如く多数の膏血を搾り取つて、資本家だけが懐を肥す為めではない。多数人類の幸福を考へ、この機械で品物を造つたならば、安く品物が出来、さうして沢山の人に頒つことが出来るやうになると云ふのが根本の精神であつたに相違ない。所が此の機械が出来てからの結果は、全然当初の精神は没却せられ、却つてこれが為めに益々貧富の懸隔を甚しくし、多数の人々の生活は非常に苦しい羽目に陥るやうなことになつたのであります。［★39］

産業革命以後のヨーロッパ社会は、その極限に戦争を迎え、自死を遂げることにな

ろうが、しかしそうであっても、物質文明は抛棄されない。物質文明への依存が自己否定に繋がる以上、それに代わる精神文明の作興が説かれようとも、物質文明に見切りをつける指向は確認されない。むしろ「而して欧羅巴の物質文明、欧羅巴の科学文明と云ふやうなものは必要はない等と云ふ人があつたならば、それは大きな間違ひであらう」[★40] と論じられたように、物質文明や科学文明を手放すことなど、ついに想像さえされなかったのである。

ならば、人間は機械文明に取り込まれるよりほかない。経済学者の本位田祥男（1892～1978）は、人間の精神生活に重きを置き、機械文明の時代においては、人間の「魂を救ふ」ことができないと嘆いていたが [★41]、そうした発言からは、その悲観が現実のものとなってしまったことが読み取られるべきであろう。精神の復興を説いたその発話は、逆に機械文明の自己増殖、人間否定の無情なる現象が確実に進行していたことを証するものだったのである。本位田の趣意とは異なって、以下のごとき現状が全面化していったのである。

> 使はれる者に意志はない、従つて人間全体が自由でなくなつて来る。（中略）機械は人間を使ふ丈ではなく、人間を分裂させる。機械の自動に対し人間は補助をする丈である。スピントルの番人たる女工はスピントルの事しか知らなくなる。施盤工は施盤の事丈しか出来なくなる。此くして、一の工場内の機械は全部的であるが、個々の労働者は各々の部分に分裂させられて仕舞ふ。[★42]

人間が機械によって使役せられる社会において、職業は専門化され、人間は職業によって分解されてゆかざるをえない [★43]。機械が主となり、人間がその補助にとどまり続ける限り、そうした事態は不可避的であったといえよう。機械文明を否定し切れない以上、そのような状況の到来は回避不能な出来事だったのである。

そして機械と人間をめぐる問題状況は決して解消されることなく、ついには1930年代以降の言説空間においてもリフレインされることとなる。現代文明における機械と人間のあり方について、外交官であった松岡洋右（1880～1946）は、以下のように解説する。

現代文明は何が著しい特徴であるかと云ふと、それは非常なる速度で機械化されつゝある、科学化されつゝあると云ふことなのである。さうして物質偏重に走つて居る。(中略)吾々は何の為に機械を発明し、何の為に変つた工夫をするか。自分の発明した、自分の作つた機械に悩まされて、形容すれば自分の作つた機械に人間が喰はれてしまうといふことは何といふ事でありませうか。[★44]

本来、機械の主であったはずの人間、人間の客であったはずの機械は、物質偏重の文明社会のなかで、その主客を転倒させてしまったのである。人間は、いまや主人たる機械の従者となり下がってしまったのだ、と。かくして、機械の人類に対する反撃は開始される。そしてその終極においては、「人類の自殺」が予見されるにまで至る。

平時に於ては機械化し科学化しつゝあるし、又精神的に人間が非人間的になる。その結果、これだけでも人類は自殺をとげつゝある、況んや戦時を予想する場合に於て〔合理的に大量の人間を殺すことのできる兵器が登場しつつあるゆえ—佐藤註〕、吾々は今や戦慄すべきものが現代文明にあるといふことを覚らなければならぬ。(中略)繰返すやうであるが、今や世界を挙げて自殺に向つて突進して居るのであります。これが世界変局の正体の一端である。これに日本がやはり世界の一部である以上、さうして一定水準以上の現代文明国の一である以上、この日本がこの変局から除外されている筈がない。[★45]

世界全体が人類の自殺に直面している限り、世界の一部である日本、そして現代文明国である日本も、その当事者としてそうした局面からは当然逃れられない。その意味で、引用文最後の一文は意味深長である。なぜなら、人類の自殺は、文明化に専念してきた日本近代の歴史それ自体によって導出されてしまう現象だからである。そうした契機は、機械文明を受け容れてきた歴程の内部に胚胎していたのである。1930年代には、かかる契機が本格的に胎動してしまったといえよう。逆説的ではあるが、文明を謳歌してきた道程の果てには、自己否定的な結末が待ち構えていたのである。

それでは、人類の自殺を回避するためには、いかなる処方が有効なのか。松岡によれば、2600年の歴史に裏打ちされた民族史、日本精神の再興によって世界を救済する選択肢しか残されていない、という［★46］。機械文明から日本精神への回帰――ひどくシンプルではあるが、前者から後者へと一挙に旋回してゆくよりほかなかったのである。国際連盟からの脱退宣言は、そうした事態を後押しするかのような役割を担っていたといえよう。

しかしそうとはいえ、単純に文明を切断し、精神へと没入することは遂行しえなかった。文明をみずから招請していた以上、その否定は自己の解体を意味してしまうからであった。そのためであろうか、皇道日本の再建設を説いた松岡にあっても、日本精神へと単線的に帰着することはなかったのである。機械の抛棄を仄めかした記述を残しながらも［★47］、機械文明と近代的兵器を全否定する言葉は、ついに発せられなかったのである。次なる戦争が予定されていた以上、けだし当然の帰結であったといえよう。

であるとすれば、人類は自死の契機を招き入れてしまうような兵器や機械を、そのうちに抱え込まざるをえない。日本精神への回帰というテーゼは、人類の自殺という矛盾を解消するために唱道されたが、そこには、半ば自殺を遂げるモメント――兵器や機械に寄りかかる自己否定的なモメント――がおり込まれていたのである。

日本精神へと舞い戻る径路は、そう単純ではなかったのである。そうした事態は、観念右翼の祖と称される平沼騏一郎（1867～1952）や、皇道派軍人（陸軍）香椎浩平（1881～1954）らの論理構成にもみて取ることができる。「日本精神に還れ」と叫んだ平沼は、日清・日露戦争の勝因を物質文明ではなく、精神文明の優秀さに求めていたが、日本精神の発揚を説いた平沼でさえ、「勿論物質的文明の発達も軽視することは出来ない」と言及せざるをえなかったのである［★48］。そして香椎にあっても、「現在は機械化された人間が、自分の作つた機械から負けて、逆に酷使せられて居る状態」でありながらも、しかし「機械が如何に横暴でも今後機械の必要は益々盛ん」になるであろう、と推定されたままであった［★49］。

（3） 自己否定の回避、自己否定への突入――京都学派の問いかけ

かくして背理はついに解消されず、背理のまま残された。そして1930年代後半から40年代前半の思想空間においては、機械（死）と人間（生）をめぐる競合がより切迫した論点として提起されるに至る。こうした論点を体系的に示したのが、京都学派系統の知識人たちにほかならなかった。

カント研究で知られる高坂正顯（1900～1969）の現代精神史論は、機械と人間をめぐる問題状況に肉薄した貴重な作品として位置づけられる。高坂によれば、近代は人間中心主義と機械主義の時代として定義されるが、近代においては、機械による人間の否定が否応なく進んでしまうことが見通される。たとえば、以下のように、である。

> 人間は機械を造り得た。そして実在の中心たるにふさはしく全自然を自己に奉仕せしめんとした。しかし機械によつて自然を支配し得たとき、人間は逆に一つの機械として、自然の必然的なる体系の一部と化したのである。之が、人間中心主義が機械主義の根據にして、且つ後者によつて否定される所以であるであらう。人間は機械を産むことによつて自然を支配した。しかしその故に機械としての自然によつて否定されるのである。之が人間中心主義の必然の運命であり、また悲劇である。そしてそこに現代の一つの悲劇があるのである。人間は自ら造つた機械によつて脅かされゐるのである。（中略）現代文明の全体が巨大な機械として、もと自らのために機械を案出した人間を、却て自己に奉仕せしめつつ、いづこの方向に向かふとも定め難く、無意味な、しかし強力な運動をつづけつつあるのである。近代の人間中心主義、自由主義、合理主義は、自らの必然の論理に従つて、自己否定への道を辿るのである。［★50］

高坂にしてみれば、現代の危機は、「人間中心主義の近代文明の自己否定」［★51］として結晶しているのである。そうした状況のなかで、人間が着実に機械化されてゆくことは免れない。高坂は、生活そのものが機械化されてゆく現象を、以下のように説明してみせる。いわく、「一定の時間に、一定の乗物に乗つて、事務所に通ふ都会人は、

近代の大都会と云ふ巨大な機械の一つの歯車にすぎないのであらう。かくて近代文明の進歩は、人間自由の確立を齎すどころか、むしろ人間自由、人間の主体性の否定に導いたのである。人造人間を造るまでもない。多くの人間は既に機械にされてゐるのである。機械的に反復される単調な日々の生活は、生活を味気なきものとせざるを得ない。ここに近代的な疲労と倦怠がある」[★52]と。そうである以上、高坂の所論が「近代の超克」に論結されることは、いきおい自然の行路であったといえよう。

しかしながら、高坂の理解にあって、近代のメルクマールたる機械文明は否定されてはならなかった。「しばしば非難される近代の合理主義、機械文明は、実に世界史上未曾有の恩恵を人類に與へたのである。このことは充分に感謝されなければならない。（中略）我々は西洋を単純に否定し得ないやうに、人間中心主義を単純に抹殺し得ない。我々も亦その合理主義、機械主義から多くを與へられ、多くを恵まれ、かかる機械文明が現代の不可欠の推進力となつてゐるからである」［★53］との発言に明らかなように、機械文明は、人類に多大な恩恵を与えた現代の推進力にほかならなかったからである。機械の否定が近代の否定に繋がり、果ては人間の否定に結実してはならなかったからである。「人間は抹殺されてはならない。人間は生かされなければならない」［★54］のである。

この限りで、「世界史の哲学」「近代の超克」は、そのうちに近代を肯定するモメントを抱かざるをえない。ここからは、機械と人間をめぐる煩悶、機械文明（近代）に対する否定と肯定をともに抱擁せざるをえない状況が読み取られるべきであろう。そしてそのような煩悶は、「世界史の哲学」「近代の超克」に関与した、西洋史家の鈴木成高（1907〜1988）、科学史家の下村寅太郎（1902〜1995）らにも共有されたそれであった。鈴木は、人間が「機械の奴隷」に成り下がっている状況を、以下のように説明する。

> 機械文明の出現は、近代における人格性の喪失を極端化せしめた。近代人は自然を支配し征服することによつて、文明の新しい段階を築いたのであるが、そのことによつて、かへつて人間の能力を超えた第二の自然をつくることとなつたのである。（中略）近代は、自然の再発見をもたらしたけれども、近代人の自然に対する態度は、単なる肯定だけでなく、支配であり征服であつたといふ点に、

大きな特徴をもつてゐた。すなはち近代人は、自然を変形してそれを人間の目的に役立たせたのであるが、ここに注目すべきことは、このことが単に自然を変形せしめただけにとどまらず、逆に人間そのものをも変形せしめたといふことである。機械は人間の意思を超えた新しき超人間的環境となり、この環境のもとにおいて、人間はかへつて機械の奴隷となつたのである。人と人との間に存した真に人間的なる繋がりも、それによつて破られた。本来人間がつくつたところのものが、かへつて人間を超越し支配する。それが機械文明の悲劇であり、ヒューマニズムの没落も文化の危機も、その根本問題をこの点にもつてゐた。［★55］

ここには、ほかの論客とほぼ同じように、人間と機械の主客が転倒してしまった状況が記されている。では、なぜ近代機械文明を否定し切れないのか。「わが国においてヨーロッパ文明が既に単なる外来文明といふ以上に深く内在化せしめられ最早や一部分われわれ自身のものとなつてゐる」から、「日本が既に近代的強国として存立するものである以上、単に外来文明の排撃といふだけでは問題を解決し得ないといふこと」、「即ち超克すべき近代は欧洲のみならずわれわれ自身の中にも存在する」からであった［★56］。

下村の言葉を借りれば、「現代の我々に於てヨーロッパは既に単なる他者ではない。我々の先人や我々も事実上近代の西洋を身に着けることに努力し、それに於て成長して来た。（中略）近代とは我々自身であり、近代の超克とは我々自身の超克」［★57］にほかならなかったからである。近代の否定は、自己否定を導かざるをえないのである。文明化を遂げてきた日本近代の歴史そのものの否定に直結してしまうがために、近代文明を単純に無化することは許されなかったのである。

第3章　煩悶の極限状況――世界戦争の直中で

そうである限り、機械と人間をめぐる問題状況が解消されることはない。近代人は、

かくして煩悶が繰り返される状況を生き続けなければならないのである。近代とは、機械による人間否定が甘受されると同時に、人間の復権が冀求される時代として概括されうる。死に向けたベクトルが作動すると同時に、生が探求され続ける時代として、である。近代人は、いわば「死して生きる」ことをなかば強制されてきたといっても過言ではない。近代とは、平時と戦時の別なく、人間が自己否定の直中に位置していることが常態化してきた危機の歴史にほかならなかったといえよう。

ここに、機械と人間をめぐる懊悩の正体を読み取らないわけにはいかない。人間か機械か、生か死か――そのどちらにも振り切れない自己閉塞状況の持続と再生産が、それに該当しよう。

第二次世界戦争期は、そうした事態が極限状況にまで達した段階として理解しうる。戦争が、現状をラジカルに変革させる潜勢力であることに変わりはない。同時代にあって、戦争は、新秩序（「大東亜共栄圏」）を創出するための争闘として意味づけられ、戦争を媒介にして、既成の思惟や観念とは一線を画した世界の創造が求められていたのである。その意味では、機械と人間をめぐる苦悶は、戦争へ突入することによってその解消が図られつつあったかのようにみえる。

しかしそうであっても、戦闘状態においては、機械（兵器）によって戦火を交えるため、機械文明を捨象することは不可能であった。物質文明に対置された精神や理念にのみ依拠するだけでは、戦争を遂行することはなし得なかったからである。以上のプロセスを経てもなお、生と死をめぐる憂悶への処方箋は結局用意されることなく、煩悶はついに解消されなかったのである。

戦争は、機械的であると同時に、遂行者の人間なくしては現実のものにはならない。だとすれば、戦争とは、人間が死に向けて生きること、まさしく「死して生きる」ことの極端な現象として理解されるべきであろう。

国際的孤立のゆえに、日本の戦時体制が軍備の輸入が困難なまま進展したことは、精神のみが取り残される事態をたしかに引き寄せた。科学の領域において、「持たざる国」言説と相俟って、それまでの欧米依存体質からの転換が図られ、「日本科学」の建設が叫ばれたことは、日本精神に見合ったナショナリズムがつくり出されていったことを告げるものである［★58］。ここに欧米コンプレックスをみて取ることは、

そう困難ではあるまい。

しかし日米戦争の直前、戦争目的をめぐる懇談会において、「理念では人間は戦はない。生きんがために戦ふのだといふ所以をはつきりさせなくてはならない」（松下正寿〈1901 ～ 1986〉）［★59］と語られていたように、理念や精神に頼るだけでは戦争は完遂されないのである。それまでインターナショナリズムによって制約されてきた主権を開封し、剥き出しの暴力闘争、赤裸な実力闘争の渦中にみずからを置こうとすれば、それはけだし当然の判断であったといえよう。

物理学者で、日本原子力の父と称される仁科芳雄（1890 ～ 1951）は、自生的科学の建設を説きつつも、精神にのみ依存することの愚を戒めた人物であった。「大東亜共栄圏」論者であった仁科は、科学者らしく「持たざる国」が「持てる国」へと成り上がるための方途として科学・技術の振興を説き［★60］、そして以下のように、自生的軍備の創造、その前提となる基礎科学の発展を訴えていた。「今日我が軍の装備の進歩を観る時、この推進の要素は欧米から輸入せられたものが尠からずあることを否定する訳には行かぬ。それが直接であるにせよ間接であるにせよ、外国からの移植なくしては今日迄の発達は困難であつたに相違ない。然るに今日この輸入は殆ど不可能になつたからには、その根本から我が国に於て育て上げなければならぬ。それは前にも述べた通り基礎科学、応用科学、技術の連鎖を経て行はれるのが結局早道である」［★61］と。

こうした発言を残していた仁科によれば、戦争の成否、その鍵を握るのは、精神力と科学の総和にほかならないと判断される。仁科は、いう。

> 今日の戦争に於て最も大切な役目を持つて居るのは精神力である。これに就ては異論のある筈はない。といふのは兵器に於ては各国共精神力に於て示される程の差異が無いからである。若し装備に於て到底追随を許さぬ程の懸隔があつた場合にはこれは又別問題である。左様な懸隔は科学・技術によつて齎され得る可能性があるといふ事を国民は銘記すべきである。［★62］

この文章を読めば、仁科は精神にのみ依拠しているようにみえなくもない。しかし

仁科は、精神にだけ恃むことはなかった。仁科にしてみれば、「ただ日本魂のみを頼つて居れば兵器や装備の点は二の次であるとして顧みないといふ議論を時々聞くことがあるが、これは危険なる独断」に過ぎないのであって、「装備の差が精神力の差を償ひ得るといふこと」にも注意を促していたのである［★63］。まるで日露戦後における丘の発話のように、である。誇るべき日本精神は、軍事力の多寡によって覆されかねないのである。まさしく、「戦の勝敗は精神力の差と装備の差との代数的和によつて決せられる」［★64］というべきであろう。

そして戦争末期、アメリカによる原子爆弾の発明と投下は、仁科の以下のごとき予言が的中したことを象徴する出来事であったといえよう。「若し假りに我が装備が著しく劣つて居て、その差が精神力の優劣の差を償ひ得る程であつたとすると皇軍の苦戦は思ひやられるであらう」［★65］との予言が、である。

そしてその先に待っていたのは、敗戦という事実であった。いうなれば、外部から強制された死である。主権を解放し、争闘の危局にみずからを置いてしまった以上、即物的な力（実力の多寡）によって勝敗が決せられてしまったのである。それは、もはや自己否定以外の何物でもない。原子爆弾という文明の利器によって、主権は毀損されたのである。それだけではない。敗戦は、物質文明を追い求め続け、人間否定のモメントを絶えず組み込んできた道程の一時的な結果であり、内部からの自滅が進んできたことの一応の末路として位置づけられる。「死して生きる」ことを「生き抜く」ことの果てには、敗戦が待ち受けていたのである。

結　言

それでは、敗戦後、とりわけ原子爆弾登場以後、以上みてきたような煩悶は、いかにして転回してゆくのか。世界が核兵器の脅威にさらされた状況のなかで、いかなる処方箋が想像されたであろうか。

ともに京都学派に属していた鈴木成高や高山岩男（1905 ～ 1993）は、そのよう

な状況下で、機械文明が人間の主人となり、人間を機械化せしめ、ついには破壊に至らしめるであろうことを観測していた知識人である［★66］。両者によれば、テクノロジーや機械文明は、特定のイデオロギー（資本主義／社会主義）には回収されることなく、全社会の寵児としてもてはやされているのであって、それらは、まさしく世界の実質的支配者として君臨していると説かれる。機械とテクノロジーが増殖してゆく過程において、世界空間（距離）は確実に征服し尽くされ、特に原爆以降は、その距離はいまや絶滅してしまった。世界の一体化を可能にしたのは、テクノロジーと機械であって、決してヒューマニズムではなかったのである。その結果、人類は原爆下における「愚者の楽園」（鈴木）状態に置かれることになった、と。

両者が直面していたのは、機械文明が自己増殖してやまない状況において、人間をいかにして救済するか、という切実な問題だったであろう。まして原水爆という未曾有の兵器が出現してしまった段階において、それはより緊迫した問いであったに違いない。

では、以上のようなスパイラルからは、いかにして脱却しうるか。この点について、両者の回答は異なるものであった。鈴木の場合、機械文明との訣別を果たし、「人間そのものの恢復」が指向される。そうした指向は、「破壊のまえにおける共同性」から人間存在を救うための結論であったとみて間違いないであろう。原子力問題に関する鈴木の発言と絡めるのであれば［★67］、鈴木は、苦悶を続けながらも、「平和利用／軍事利用」に回収されないあり方を探求していたといえよう。

高山の問いかけも、「平和利用／軍事利用」を超越した発問として一応は位置づけられる。しかしながら、高山は、機械文明のさらなる追求を促し、超絶的兵器の開発こそが戦争抑止に繋がり、世界平和の基礎になるであろうことを見越していた。鈴木の回答とは対照的に、高山の場合、機械文明への没入を説いたのである。その限りで、高山の回答は、人間を機械化せしめ、人間否定の途を切り拓かざるをえない。そしてついには、原子力の「平和利用」を推進し、「軍事利用」への応用可能性を担保しておくべきことが説かれるまでに至る［★68］。

ここで一転、高山の発問は、終極的に「平和利用／軍事利用」の用語法に回収されてしまったといえよう。ここに、「平和利用／軍事利用」という枠組の拘束力を読み

取らないわけにはいかない。この用語法に基づき、戦後日本は潜在的核保有国化を目指してきたのである［★69］。高山のケースは、戦後日本の軌跡を象徴しているように思えてならない。大勢としては「平和利用」が選択されてゆくが、「軍事利用」にも転用できる余地を残しておくことで、日本を世界政治上に位置づけようとする思考は、戦後政治指導者のそれでもあったからである［★70］。

だとすれば、これまでみてきたような機械と人間をめぐる煩悶、生と死をめぐる煩悶が、戦後日本における原発推進の途にも擦り込まれているとみても、あながち的外れではなかろう。敗戦前後の別なく、隘路は隘路のまま、繰り越されたといっても過言ではない。人間否定に通じることを知りながらも、機械文明の促進が図られたことと、原発国家を突き進んできたこと――それらを重ね合わせるのであれば、その里程は、人間否定的な原子力とともに死を抱いてきた、あるいは「死して生き」てきた歴史そのものにほかならなかったからである。

世界が発見し尽くされた「愚者の楽園」にあって、人間否定的な機械や原子力を保持し続ける限り、たとえ目にはみなえなくても、死はつねにその隣に待ち構えていたといえよう。3・11は、そうした事態を明るみに出した事件として銘記されるべきなのかもしれない。

日露戦争期において、自己創造的に造成された規範にしたがって突き進んできた歴史は、自己否定の隘路をつねに抱え込みながら、敗戦を経由し、そしてついには以上に記したような末路に辿り着いてしまったのである。それはもはや、自己従属的な歴史の結果というよりほかない。そしてその一応の起点が、日露戦争期に求められるであろうことだけは、間違いないように思われる。

■註

★1――片山杜秀は、日露戦後の時代状況について、著書『近代日本の右翼思想』（講談社選書メチエ、2007年）のなかで、以下のように説明する。いわく、「日露戦後には、近代化の徹底の成果と、世代の交代と、欧米列強に伍するという明治国家のとりあえずの目標の達成による国民的な気抜けとによって、日本の伝統というものが、倫理道徳から細かな生活習慣に至るまで急速に蒸散してしまう。精神的に根なし草になった近代人らしい近代人が大挙して生まれ、日本

の近代は精神史的に本当に近代らしくなってくるのである」と（13 ～ 14 頁）。日露戦後を新しい時代と見做す立場からの論及であるが、簡潔ながら重要な指摘である。

★ 2――岡義武「日露戦後における新しい世代の成長――明治三八―大正三年」（『岡義武著作集』第 3 巻、岩波書店、1992 年所収、初出 1967 年 2・3 月）223 頁。

★ 3――松本三之介『明治思想史――近代国家の創設から個の覚醒まで』（新曜社、1996 年）。

★ 4――三谷太一郎『大正デモクラシー論――吉野作造の時代とその後』（中央公論社、1974 年）8 頁。

★ 5――松尾尊兊『大正デモクラシー』（岩波書店、1974 年）V 頁。大江志乃夫「世界史および日本史における日露戦争」（『史潮』新第 7 号、1980 年 9 月）24 頁。

★ 6――福沢諭吉「日清の戦争は文野の戦争なり」（『時事新報』1894 年 7 月 29 日）、『福沢諭吉全集』第 14 巻（岩波書店、1961 年所収）。同「満清政府の滅亡遠きに非ず」（『時事新報』1894 年 8 月 1 日）、同上所収。

★ 7――加藤弘之「日露の運命」（『太陽』第 10 巻第 5 号、1904 年 4 月）54 頁。

★ 8――大隈重信「日露戦争に就て」（『太陽』第 10 巻第 4 号、1904 年 3 月）94 頁。

★ 9――同上、94 頁。

★ 10――美濃部達吉「（再ヒ）法律ノ裁可ニ就テ」（1904 年 12 月）、同『憲法及憲法史研究』（有斐閣書房、1908 年）161 頁。

★ 11――美濃部達吉「法律ノ裁可ニ就テ」（1904 年 3 月）、同上所収、140 頁。

★ 12――美濃部達吉「（再ヒ）法律ノ裁可ニ就テ」162 頁。

★ 13――同上、162 ～ 163 頁。

★ 14――吉野作造「露国の敗北は世界平和の基也」（1904 年 3 月）、『吉野作造選集』5（岩波書店、1995 年）9 頁。

★ 15――吉野作造「露国に於ける主民的勢力の近状」（1905 年 5 月）、同上所収、12 頁。

★ 16――吉野作造「露国貴族の運命」（1905 年 5 月）、同上所収、14 頁。

★ 17――レーニン「専制とプロレタリアート」（1905 年 1 月）、『レーニン全集』第 8 巻（大月書店、1955 年）10 頁。

★ 18――レーニン「旅順の陥落」（1905 年 1 月）、同上所収、38 頁。

★ 19――以上の論点については、三谷太一郎『近代日本の戦争と政治』（岩波書店、2010 年、初出 1997 年）28 ～ 31 頁、加藤陽子『戦争の日本近現代史』（講談社現代新書、2002 年）148 ～ 152 頁、同「今、日露戦争を振り返る意味」（『環―歴史・環境・文明』第 19 号、2004 年 10 月）214 ～ 215 頁から教えられた。

★ 20――酒井一臣『近代日本外交とアジア太平洋秩序』（昭和堂、2009 年）。

★ 21――煙山専太郎「日清日露の役」（国史研究会編『岩波講座日本歴史』、岩波書店、1934 年）。

★ 22――加藤弘之『進化学より観察したる日露の運命』（博文館、1904 年）20 頁。

★ 23――同上、30 頁。

★ 24――丘浅次郎「人類の生存競争」(『中央公論』1905 年 10 月号) 32 頁。
★ 25――拙稿「黎明期国際法学の国家構想」(『立命館史学』第 30 号、2009 年 11 月)。
★ 26――寺尾亨「世界平和及び平和運動」(『太陽』第 17 巻第 15 号、1911 年 11 月) 218 頁。
★ 27――前原光雄「国家主義より国際主義へ」(『法律春秋』第 3 巻第 5 号、1928 年 5 月) 24 ～ 25 頁。
★ 28――この論点については、拙稿「加藤弘之の国際秩序構想と国家構想――「万国公法体制」の形成と明治国家」(『日本史研究』第 557 号、2009 年 1 月)、同「「社会進化論」と「国際民主主義論」のあいだ――加藤弘之と吉野作造」(『立命館大学人文科学研究所紀要』第 96 号、2011 年 3 月) を参照されたい。
★ 29――加藤前掲『進化学より観察したる日露の運命』48 ～ 49 頁。
★ 30――丘浅次郎「所謂文明の弊の源」(『中央公論』1909 年 1 月号)23 ～ 24 頁。
★ 31――同上、23 頁。
★ 32――丘浅次郎「戦争と平和」(同『進化と人生』、東京開成館、1906 年)、同「人類の征服に対する自然の復讐」(『中央公論』1912 年 1 月号)。
★ 33――河上肇「機械的現代観 (附、日本の最大憂慮)」(『中央公論』1910 年 7 月号) 22 頁。
★ 34――同上、27 頁。
★ 35――同上、30 頁。
★ 36――同上、29 頁。
★ 37――金子馬治「行詰れる物質文明の破壊――戦後思想界の傾向について」(『太陽』第 22 巻第 8 号、1916 年 6 月) 169 ～ 170 頁。
★ 38――満川亀太郎『世界現勢と大日本』(行地社出版部、1926 年) 56、57 頁。
★ 39――同上、52 頁。
★ 40――同上、57 頁。
★ 41――本位田祥男「機械文明」(同『人間復興』、日本評論社、1926 年) 45 頁。
★ 42――同上、42 頁。
★ 43――同上、43 頁。
★ 44――松岡洋右『非常時に際し全国民に愬ふ――一国一党論・政党解消論』(文明社、1934 年) 59 ～ 60、67 頁。
★ 45――同上、71 ～ 72 頁。
★ 46――同上、73 ～ 76 頁。
★ 47――『非常時局に直面し松岡洋右氏の憂国の叫び』(久留米市・佐賀市有志、1934 年) 11 頁。
★ 48――平沼騏一郎「日本精神に還れ」(『改造』1934 年 2 月号) 233 頁。
★ 49――香椎浩平『英雄日本民族の自覚』(第一書房、1940 年) 264、265 頁。
★ 50――高坂正顯「現代の精神史的意義」(同『歴史哲学と政治哲学』、弘文堂書房、1939 年) 27、35 頁。高坂の当該論文については、廣松渉『〈近代の超克〉

論――昭和思想史への一視角』（講談社学術文庫、1989 年）第二章が詳しい。
★ 51――高坂前掲「現代の精神史的意義」31 頁。
★ 52――同上、32 ～ 33 頁。
★ 53――同上、30、36 頁。
★ 54――同上、40 頁。
★ 55――鈴木成高「歴史と人格性」（同『歴史的国家の理念』、弘文堂書房、1941 年）318 ～ 319 頁。鈴木については、渋谷要「近代機械文明批判と「近代の超克」の問題意識――鈴木成高の諸論を中心として」（石塚正英・工藤豊編『近代の超克――永久革命』、理想社、2009 年）、中島岳志「京都学派の遺産――鈴木成高における世界史の哲学と戦後保守」（酒井哲哉編『日本の外交』第 3 巻、外交思想、岩波書店、2013 年）を参照。
★ 56――鈴木成高「「近代の超克」覚書」（『文学界』第 9 巻第 10 号、1942 年 10 月）42 ～ 43 頁。
★ 57――下村寅太郎「近代の超克の方向」（1943 年）、河上徹太郎・竹内好『近代の超克』（冨山房百科文庫、1979 年）112、113 頁。
★ 58――梶井剛「日本科学の建設」（『中央公論』1941 年 1 月号）。
★ 59――「外交懇談会（戦争目的は何とすべきか、日米交渉の議題）」（1941 年 10 月 7 日）、土井章監修『昭和社会経済史料集成』第 14 巻（海軍省資料 14、大東文化大学東洋研究所、1989 年）286 頁。
★ 60――仁科芳雄「翼賛選挙と科学技術」（『中央公論』1942 年 4 月号）185 頁。
★ 61――仁科芳雄「戦時下の基礎科学」（『中央公論』1942 年 5 月号）93 頁。
★ 62――仁科前掲「翼賛選挙と科学技術」185 頁。
★ 63――仁科前掲「戦時下の基礎科学」93 頁。
★ 64――同上、94 頁。
★ 65――同上、94 頁。
★ 66――以下の記述は、高山岩男「機械文明の行衛」（日本放送協会編『人生読本』第 4、春陽堂書店、1954 年 8 月）、鈴木成高「機械文明」（『現代史講座』第 1 巻、危機に立つ近代、創文社、1953 年）、同「世界の一体化」（『現代史講座』第 5 巻、明日への課題、創文社、1953 年）に基づく。
★ 67――鈴木成高「原子力時代と文化革命――真の平和論を求めて」（『改造』1952 年 2 月号）。
★ 68――高山岩男「原子力船建造に遅れるな」（『経済復興』第 741 号、1967 年 1 月）。高山については、不充分ながらも、拙稿「原子力時代における二つの憧憬――主権と世界政府をめぐって」（『史創』第 3 号、2013 年 5 月）で論じたことがある。
★ 69――小路田泰直「ヒロシマからフクシマへ」（『史創』第 1 号、2011 年 8 月）。
★ 70――岸信介（1896 ～ 1987）は、そうした政治家として位置づけられる。岸信介『岸信介回顧録――保守合同と安保改定』（廣済堂出版、1983 年）395 ～ 396 頁。